2023（令和5）年 折り鶴平和大使のヒロシマ日記

川西市では、「非核平和都市宣言」の趣旨にのっとり、市民平和推進事業として、今年度も「折り鶴平和大使」派遣事業を実施しました。

今年度の折り鶴平和大使に選ばれたのは、川西北陵高校1年生の**小室苺々春**さんと履正社中学校3年生の**出野穂和奏**さんです。

2人の大使は、8月6日に広島市で開催された平和記念式典に市民の代表として参列するとともに、市民が平和の願いを込めて折ったリンドウ色の折り鶴を平和公園の「原爆の子の像」に捧げてきました。

ここでは、2人の大使の派遣後の活動報告文を掲載します。

市民が折った約1万7千羽の折り鶴

7月27日（木）市役所にて壮行式

（出野）

市長さんから受け取った折り鶴は、市民の皆さんの平和への強い願いが詰まっていると感じました。一つ一つの折り鶴から伝わってくる思いは、私にとって大使としての実感を感じさせるものでした。

8月5日（土）広島到着

（出野）

原爆ドームは、遺構が78年経った今も存在し、そのまま保存されていることに驚きました。その存在が訴え続ける戦争の惨（むご）さと平和への願いは、私たちが忘れてはならない大切なメッセージだと強く感じました。

広島平和記念資料館などを見学

（出野）

資料館では、原爆投下前と後の広島市の様子の違いに圧倒されました。その一発の原子力爆弾がもたらした破壊力の凄まじさに、言葉を失いました。特に、実際の爆心地からの距離とそれによる被害の違いを示す展示は、その恐ろしさを強く印象づけられました。

資料館に展示されている多くの遺品は、被爆者の方々の日常生活とその一瞬にして失われた命を物語っていました。その中には、私と同年代の子どもたちの遺品も含まれており、その事実に直面することで胸が締め付けられる思いでした。

（小室）

リニューアルしてからの資料館に初めて訪れました。折れ曲がった鉄骨、人影が残ったままの石、8時16分で止まったままの時計がとても衝撃的でした。テレビで見るものとは全然違う、現実で起きた悪夢のような出来事に唖然としました。

原爆が落とされてから78年経った今も、原爆の恐怖はまだ終わっていません。原爆により苦しみながら亡くなられた方、資料館に大切な家族の写真や思い出の品を提供してくださった方々の平和への思いを裏切らないよう、資料館を訪れた私たちが原爆の恐ろしさを伝えていかなければならないと強く感じました。

折り鶴を捧ぐ

（出野）

折り鶴を奉納するケースには世界中から寄せられた千羽鶴がたくさん飾られていて、私は平和への願いが世界中に広がっていることを実感しました。

その像を目の当たりにし、そして私たち自身が折り鶴を捧げることで、私たちは自分たちの役割と責任を改めて感じることができました。

（小室）

原爆の子の像は、原爆の影響により白血病で亡くなった佐々木禎子さんの同級生らによる募金活動により作られた像です。そこには色々な色で折られた折り鶴が奉納されていました。そこに川西市民の思いの込もった、りんどう色の折り鶴を捧げた時、平和がずっと壊されることなく続くように祈りました。

原爆の子の像は完成から今も変わらず、広島の町が平和であるよう見守っているように見えました。

ひろしま子ども平和の集い

（小室）

記念式典の後、隣の国際会議場で開かれていた「ひろしま子ども平和の集い」に参加し、そこで被爆者のお話を聴きました。その方は女学生、工場で作業をしている時に被爆し、建物は爆風により崩壊し、瓦礫に呑み込まれてしまいました。もうだめかと思った時に、友達の足を見つけ一緒に脱出したそうです。

私たちが安全に日常を送り、友達と過ごすことができているのは、過去の苦しみを乗り越えてきた人たちがいるからだということに気付かされました。

その方は、「自分を大切にしてほしい。このことを一番伝えたい。」と話していました。そのおもいを無駄にしないよう、これからを生きていく私たちが繋げ、伝えていきたいと心から思いました。

8月6日（日）平和記念式典

（小室）

平和記念式典に参加しました。

広島市の小学生による平和への誓いで印象に残っているのは、「平和のために私たちができることは、みんなの笑顔のために自分の力を使うこと」という言葉でした。自分の力を人を傷つけるためではなく、人を幸せにするために使う。そうすればみんなが平和に過ごせるのではないでしょうか。世界には残念ながら自分の力を人を傷つけるため、自分の権力をアピールするために使う人がいます。世界中の一人ひとりがみんなの笑顔のために、ということを少しでも意識できれば、世界も少しずつ平和になるのではないかと私は思いました。

（出野）

式典には、国籍や年齢を問わず、世界中の人たちがいました。会場には、原爆で犠牲になった人々への追悼の意を込めた黙祷の時間が設けられていました。その瞬間、全ての人々が一つになり、平和を強く願う雰囲気が会場全体を包みこんでおり、その強い思いは、核兵器が二度と使用されない世界を求めるものだと思いました。

式典の中で特に印象的だったのは、こども代表のスピーチでした。その言葉は、私の心に深く響き、私にとって忘れられない時間となりました。

非核平和都市宣言

世界中の人々が等しく平和な暮らしを営むことは、人類共通の願いです。

それにもかかわらず、地球上の全生命を滅ぼしてもなお余るほどの核兵器が蓄積され、世界の平和に深刻な脅威を与えています。

わが国は世界で最初の核被爆国として、核兵器と戦争の恐ろしさを全世界に訴え、その惨禍を絶対に繰り返させてはなりません。

私たちは祖先から受け継いできた猪名川の清流、豊かな緑、そして人類共通の財産である青く美しい地球を永遠に守り続けていくためにも、核兵器をつくらず・持たず・持ち込ませずの「非核三原則」を遵守するとともに、恐るべき核兵器の廃絶を願い、人と人とが憎しみあい傷つけあうことのない世界の創造を求めて、ここに市民の総意のもと、川西市を「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）7月14日　川西市

折り鶴平和大使になって

（出野）

折り鶴平和大使として広島で体験したことは、私に大きな影響を与えました。学校の授業で学んだ戦争のことと資料館や本川小学校の見学で学んだことでは、感じる残酷さはとても違いました。そして、平和大使の活動で一番印象に残っているのは、平和記念式典です。式典でのこども代表の言葉「生き残ってくれてありがとう、命をつないでくれたから今の私たちがあります。私たちにもできることがあります」は、私にとって大きな感銘を与え、より平和への願いが強くなったのがわかりました。

この体験を通じて、自分自身が平和への願いを持つだけでなく、その思いを周囲に広める役割を果たさなければいけないと思いました。そして、その役割を果たすためには、自分自身が行動することが重要であるということを学びました。

私はこれからも、折り鶴平和大使として、そして一人の中学生として、平和への願いを持ち続け、その願いを現実にするための行動を続けていこうと思います。

（小室）

私は折り鶴平和大使として2日間、広島で学び、改めて平和の大切さを身をもって感じました。

年月が流れ、広島で起きた悲劇、平和への思いが少し薄れてきている人も多いと思います。私たちが広島で感じたことや思いをこの紙面を通して知っていただき、もう一度世界の、川西市の平和について考える機会になったら嬉しいです。みんなで平和について考えることが一番大切だと私は思います。二度と同じ過ちを繰り返さないように発信することで、少しでも平和な世の中になってほしいと強く願っています。